

Social influence 社会的影響 p.367

- 個人間集団間に限らず、一方の行為者が他方の行動、態度、感情などを変化させること。個人間の影響の場合に、対人影響 (interpersonal influence) ということがある。他者に影響を及ぼすことのできる源泉として社会的勢力の基盤が分類されている。社会的影響において、他者に影響を及ぼそうとする意図が影響者に存在する場合と存在しない場合に分けることができる。

Social psychology 社会心理学

p.365

- 個人とその社会的状況との間で相互的な影響過程を科学的に研究する学問の一分野。
P. 365

Attribution error 帰属の誤り

p.161

- 基本的な帰属の誤り
 - 他者の帰属において、行為者本人の側の内的な要因が重視されすぎて、外的状況要因によって決定された行動からも、行為者の胎動や性格などが推測されてしまう傾向をさし、非常に広範に見られる傾向であるためにこのように呼ばれている。
- コンセンサス情報の軽視
- 行為者=観察者の帰属の相違
- 利己的帰属

Audience effect 見物効果 p.239

- 見物人としての他社が存在することによって、個人の課題遂行が促進される現象。社会的促進が生じる際の他者の存在には、同一課題を同時に独立に行う場合と、単に見物人である場合とがある。前者の場合の生じる社会的促進を共行動効果 (**co-action effect**) とよび、後者の場合に生じる社会的促進を見物効果と呼んでいる。見物効果が生じるのは、他社が存在するだけで個人の覚醒水準を高めるからとする説と、評価者として存在するために個人の評価懸念を高めるからとする説がある。

Social facilitation 社会的促進

p.372

- オルポートによって名づけられた社会的促進とは、見物者や共行動者が存在することにより、個人の遂行行動が促進される現象を漠然と意味していた。抑制も報告された。→動因理論 ↓ いくつかのアプローチ
 - 評価懸念説(コッレル、1972)
 - 注意のコンフリクト仮説(サンダース、1981)
 - 自己客体視説(ウィックランド、1975)
 - 自己呈示的立場(ボンド、1982)

Social inhibition 社会的抑制

p.376

- 個人が未学習課題や複雑課題を遂行するとき、他者から見られていたり、他者も同時に遂行していたりすると、一人で遂行した場合と比べて、遂行行動の劣化が見られる現象。これは、評価的な他者が存在することにより、個人の動因水準が高められ、正反応だけでなく多くの誤反応も同時に活性化されてしまうためだと説明されている。なお、比較行動学（エソロジー）では、種の保存のために、同種の個体間では攻撃行動が抑制されていることの意を表す。

Meta-analysis メタ分析 p.831

- 同一の研究課題に関して、独立に行われた研究の結果を統計的手法によって統合する方法。大きく分けて2つの方法がある。
 - 複数の研究で行われた仮説検定の結果を統合して、全体としての仮説検定を行う方法。
 - 複数の研究で計算された効果量や相関係数といった推定値を統合し、全体としての推定値を求める方法。
- 問題点
 - 学術雑誌から研究を集めるが、その論文の多くは有意差のある論文。
 - 各研究の質＝同質性が求められる
 - 研究間の独立性

社会的促進と抑制の2つの理論

- 動因理論による説明

- 見物者や共行動者の存在は、個人の一般的覚醒水準ないしは動因水準を高めることによって、優勢反応の生起率を増大させる。その結果、単純な課題やよく学習された課題を遂行する場合のパフォーマンスは促進され、複雑な課題や未学習の課題を遂行する場合のパフォーマンスは抑制される

- 注意要因による説明

- 他者の存在は遂行者の注意を散逸させる。この視点では、社会的促進は作業が単純で中心手がかりが小さくしか要求しないときに起きる。そして社会的抑制は作業が複雑で広範な注意を向けるのを要求するときに起こる。

Zajonc ザイアンス p.287

- ポーランド生まれのアメリカの社会心理学者。
代表的な研究
 - 社会的促進現象を、ハルとスペンスの動因理論によって統合的に説明。
 - 単純接触仮説-対人魅力
 - 知能水準と家族数、出生順位との関係

Stroop effect ストループ効果 p.474

- 言葉の意味とは異なる色のついた色名単語の色を命名する際に、単なる色パッチを命名するよりも反応が遅くなる現象のこと。
- ストループ効果の成立要因には、近く段階での二つの属性の競合、単語を読む速度と色の命名速度の違い、色と文字の表す概念間の競合などが挙げられている。

Deindividuation 没個性化 p.800

- 集団・群集状況では個人状況と異なり、平生は抑制されていた行動、特に非合理的、刹那的、攻撃的、反社会的な行動が起きやすくなるという現象を扱った概念。

Le Bon ル・ボン (1841~1931)

- 群集心理学の研究で著名なフランスの思想家。群集をひとつの無意識的統一体と捉えると共に、衝動的で移り気、膨張的で単純、偏狭では快適、劣等で非合理的なものともみなして、貴族主義的立場から批判した。群衆の中にいるだけで、個人は群集の持つ被暗示性・感情性・興奮性・無責任性・極端性等の特性に容易に感染すると主張し、群集心理学という言葉に独特な意味を与え、その後の群集心理学研究に多大な影響を及ぼした。

Anonymity 匿名性 p.639

- 自分の周囲にいる他者は自分をどこの誰かと気にしていないし分かりもしないという感じを人に引き起こす状況の特徴のこと。没個性化との関連で注目されてきたが、近年の研究によれば匿名性は必ずしも没個性化の規定要因ではない。これとは別に、都市化社会の人間関係の特徴と関連する概念として使われることも多い。

Social norms 社会規範 p.364

- 社会や集団において個人が同調することを期待されている行動や判断の基準、準拠枠 (frame of reference)。コレには行動の望ましさも含まれており、必ずしも社会や集団における平均的行動であるとは限らない。

Bystander effect 傍観者効果 p.793

- 援助が必要とされる事態に自分以外の他者が存在することを認知した結果、介入が抑制される現象。一般には、傍観者の数が増えるほど、また、自分より有能と思われる他者が存在するほど、介入は抑制される。この現象が生起する理由は、責任の分散、多数の無知、評価懸念で説明されている。

Pluralistic ignorance 多数の無知

p.562

- 多元的無知ともいう。オルポートの造語。集団や社会の成員が互いに、自分の公的行為は自分の感情や意見と一致していないと思うにもかかわらず、他の人の公的行為は、当人の感情や意見を反映したものだとして推測すること。成員が互いに、各自の私的な感情や意見を知らないために起こる認知状態である。

Diffusing of responsibility

責任の分散 p.507

- 複数の人間がある事象に対する責任をオフと、各自に責任が分散され、各自が感じる責任が、ひとりだけで責任を負うときよりも軽くなること。援助行動における傍観者効果の説明概念としていられている。援助が必要とされる事態に複数の人間がいることを認知すると、介入に対する責任、非介入に対する非難が各自に分散され、一人でその事態に直面しているときよりも介入が抑制される。集団討議後の意思決定で見られるリスクシフトの説明概念としても用いられる。

Interim summary

- 状況の力は人間の行動を形成するたんのとんでもない力を持っていて、このような強力な社会的状況の力は目に見えない。人々はよく他人の行動が彼らの個性、性格、特性によるものだと誤って決めてしまう、それを基本的な帰属の誤りという。
- 共行動者か見物人がいるとき、人々は簡単な作業をうまくこなす、そして複雑だとうまくできない。これらの社会的促進と社会的抑制は効果は他者の存在が人々の注意を狭めるために起こる。
- 群衆に時々見られる攻撃行動は没個性化の状態の結果で、個々人は個人アイデンティティを失って、グループ内に溶けたように感じる。匿名性と集団規模は没個性化に役立つ。没個性化はその集団に感情的な特別な状況で社会的規範を結びつける。これは集団規範が攻撃的なとき攻撃性は増し、温和なときは攻撃性が減少する。
- 緊急事態における傍観者は一人にいるよりも集団にいるほうが介入や援助が少ないようである。介入を減らす2つの要因は、多数の無知と責任の分散である。おだやかさが現れるよう試みることによって、傍観者は他人のために緊急事態でないとして決め付けてしまい、それ故に多数の無知の状態を生み出す。他者の存在は他の誰もが行動の必要性を感じないという責任の分散もさせる。

Conformity 同調 p.630

- 同調というのが意味は社会影響の中でも限られた意味合いを持つ。手段や他者の設定する標準ないし期待に沿って行動することであり、これによって個人と手段の斉合性は増大する。これは対立する個人と集団成員の見解を受け入れることであり、集団圧力のないところで個人が独立に同一刺激に対して同じ判断、行動をとることとは区別しなければならない。すなわち非同調には「独立」と「反同調」とがある。

Asch アッシュ(1907~) p.10

- ポーランド生まれの社会心理学者。1920年アメリカに渡る。ブルックリン大学、プリンストン大学等の教授を歴任。ゲシュタルト心理学者ヴェーラーとはいまいの影響下に情報の各要素は相互の関連の中で意味づけられるべきであるとし、社会心理学を個人心理学に還元すべきでないことを主張。印象形成における初頭効果や特定の性格特性の効果を見出した(1946)。集団内多数のご判断が個人の判断に大きく影響するという衝撃的な同調実験を行った(1951, 56)。

Compliance 応諾 p.77

- 承諾ともいう。個人が他者からの働きかけ（依頼や説得など）に応じる行動を執ったり、態度を変化させたりすること。服従より広い意味で使われる。

Obedience 服従 p.746

- 権威者からの命令や指示に従うこと。多くの場合、自分の意思に反する行動や考えをとることになる。このとき、件自社は政党勢力を行使し、影響を受けるが母、自分が内在化している制度や規範に基づいて反応していることになる。権威への服従に関する研究として有名なのが、ミルグラムの実験である。

Minority influence 少数派の影響

p.411

- 社会的影響過程の研究の中で少数派に関しては、アッシュに代表されるように、多数派の影響下にあるネガティブな面が強調されてきた。モスコヴィッチは、こうした従来の同調中心の研究を機能モデルと称し、研究の行き詰まりを批判、これを打開するためには集団の変化に始点を移動すべきであるとし、集団内の少数派が果たす役割に肯定的かつ積極的意味づけをする発生モデルを提案した。逸脱者や少数派を反社会的存在としてではなく、少数は時として権力に屈しない勇気を持った魅力的な存在として肯定的に捉えようとする観点に立つ。

Attitude change 態度変容 p.553

- 態度変化ともいう。個人の行動を決定する心的状態である態度が変容する過程にいくつかある。すなわち、主に他者の発言、文章などの言語によって態度を変容させる説得の過程。報酬、罰、種々の権威などの社会的勢力によって態度を変容させる過程。および、環境の変化を含む体験によって態度を変容させる過程などである。

Milgram ミルグラム (1933~84)

p.824

- アメリカの社会心理学者。ハーヴァード大学で博士号を取得し、イエール大学、ハーヴァード大学を経て、1967年からニューヨーク市立大学の大学院センターの教授になった。彼がイエール大学時代に行った「権威への服従」の研究は、個人の置かれる状況によっては何人であっても反道徳的行動を取りうることを示して、数々の賞を獲得した。その後も、彼は都市生活における人間の心理を追及して、卓越したセンスで人の意表をつくような街頭でのフィールド研究をいくつも行った。

Debriefing デイブリーフィング p.606

- ① 特に社会心理学における実験において、実験に参加した被験者に対して、実験終了後に研究の全体的な説明を行う手続き。なぜ一時的にせよ被験者を「騙す」手続きが含まれていたのかについて説明し、被験者のあらゆる疑問に答える。被験者の心理的状态を、実験前の水準に回復させることが第一の目的であるが、同時に、被験者が実験の場面をどのように近くしていたかに関して有用な情報が得られることも多い。
- ② 心的外傷を受けた被災者や被害者が、自分たちの体験をグループで話し合うこと。

Interim summary

- アッシュの古典的同調実験は満場一致の集団では、その集団の判断に同調するよう個人への強い圧力が存在している-それらの判断が明らかに間違っていると
きでさえ-のを明らかにした。さらに同調は一人がその集団に反対していてさえも
観察された。
- 大きな集団での少数派は、厳格で、ドグマティックで、尊大でなく、反対意思を維
持し続ければその視点に多数派を向けさせることができるのを、少数派の影響と
呼ばれる過程である。少数派は時に多数派から個人的態度変容を、ただの公へ
の同調でなく起こすことさえある。これは暗黙の哀れみ接触で多数派は少数派が
影響を及ぼすのを期待はしないが、意思を持つのに同意するというのを通して起
こると考えられる。
- ミルグラムの古典的な権威者への服従実験は、一般人が実験者の無罪の人に
強い電気ショックを与える命令に従うことを証明した。高い従順での服従を生む
状況的要因は、(1)実験者による監督、(2)行動の結果からその人の距離を置く
バッファー、(3)役割モデル、(4)状況の出現特性がある。
- ミルグラムの調査は重要な疑問点はないが、彼の実験の倫理は熟考された論争
を生んだ。同じ調査が今日行われることができるかどうかは不明瞭である。

Internalization 内在化 p.646

- 外側の社会規範や価値を、自分の中に取り入れて、自分自身がこれに合致した規範や価値を身につけるように変化していく過程を、内在化または内面化という。いったん内在化されると、賞罰や命令がなくても、自発的にその規範や価値に適合する行動を取るようになる。したがって内在化は、子供が社会化していく基本的方向であり、特に道徳性の発達に不可欠な過程とみなすことができる。この過程は精神分析学でも、取り入れの概念で説明されている。

Rationalization 合理化 p.265

- 葛藤や罪悪感を伴う言動を正当化するために社会的に承認されそうな理由づけを行う試み。精神分析によって明らかにされた心的規制の一つである。合理化が成功すると不安や葛藤は解消され、言動の真の意味は意識化されてないという。合理化の現れ方には、イソップ物語に出てくるキツネの「すっぱいブドウ」式の言い訳のほかにも、失敗を偶然的な原因に帰す場合や言動の責任を外的な要因に求める場合などがあげられる。

Cognitive dissonance theory

認知不協和理論 p.667

- フェスティンガーの提唱した認知的動機付けに関する理論。認知的斉合性理論の一方を代表する。バランス理論と類似しているが、より包括的である。この理論によれば、自己と周囲の環境についてのあらゆる知識は認知要素と呼ばれ、任意の二つの認知要素 x と y だけを考えて、 $\text{not-}x$ が y から帰結される場合、その x と y から不協和が発生する。不協和は心理的に不快であるので、人はそれを低減したり回避しようと試みる。不協和の大きさは、不協和な認知要素が重要であればあるほど大きい。また、特定の認知要素と連合する不協和の大きさは、関連する認知に占める不協和な認知の割合が高いほど大きい。

- フェスティンガーが不協和が発生しやすい状況として例示した。
 - 決定後
 - 強制的承諾
 - 情報への偶発的・無意図的接触
 - 社会的不一致
 - 現実と信念・感情との食い違い
- 理論的な不協和の低減法
 - 不協和の関係にある認知要素の一方を変化し相互に協和的關係にすること
 - 不協和な認知要素の過小評価と協和的な認知要素の過大評価
 - 新しい協和的認知要素の追加
 - 人々は新たな不協和に発生や害損の不協和の増加をもたらす譲許や情報を、積極的に回避(仮定)
- 不協和低減の具体的現れ方
 - 認知の再体制化・態度変化
 - 行動の変化
 - 環境の変化
 - 近くと認知の歪曲(perceptual and cognitive distortion)
 - 人物・状況・情報への選択的接触(selective exposure)

Self-perception theory

自己知覚理論 p.333

- 自分自身の感情や態度などの内的状態を知覚する過程に関して、ベムが提唱した理論。この理論によれば、本人にしか分からない直接の内的手がかりが弱く乏しい場合には、自己知覚の過程は他者近くの過程と機能的に同一だという。つまり、他者の行動を観察した時に、その行動とそれが生じた状況とを考えあわせて、他者の感情や態度などを推論するのと同じように、自己に対しても、自分の行った行動とその際の状況とを手がかりにした推論によって、内的状態を知るのだというのである。その場合に重要なのは、状況が行動をコントロールするような性質を持っていたかどうかという点である。報酬や社会的拘束などのように、行動を協力にコントロールする要因が存在する状況で行動が起こった場合には、行動から内的状態を推論することは困難であるが、そのような要因がないときには、行動が感情や態度などの内的状態を反映したものだとして推論することができる。
- 自己知覚理論は、当初は、スキナー一竜の行動主義的立場に立って、認知的不協和の理論の観点から説明されてきた現象を、「不協和」という特別な動機状態を仮定することなく解釈しようとする試みとして出発した。たとえば、少ない報酬のもとで態度に反する行動をするよう誘導されたときには、その後自分がした行動の方向へ態度を変化させやすいという現象が知られており、これは不十分な正当化 (insufficient justification) の効果として認知的不協和理論から説明されてきたが、自己知覚理論は別の見解を提出して、不協和理論との間で激しい論戦を展開した。自己知覚理論の立場から考えると、これは態度変化を示す現象ではなく、被験者が、自分のした行動と報酬の額などを考えあわせて行った推論の結果であると解釈できる。自己知覚理論はその後、帰属理論の枠組みの中に統合されて、不協和理論からは予測が不可能な領域にも適用範囲を広げ、自己帰属に関する数多くの実証的研究を導いた。

Over-justification effect

過剰な正当化効果 p.117

- 外的な報酬を与えることで内発的な動機づけが失われてしまうこと。ここで内発的な動機づけとは、何らかの行動をとることそのものが、その行動をとる人にとって報酬となる過程をさしている。本来行動そのものが報酬であったにもかかわらず、それに対して外的な報酬を与えることによって、その行動が外的な報酬を得るための手段と見なされるようになる。その結果として内発的動機づけが失われると考えられる。

Reference group 準拠集団 p.402

- 個人の意見、態度、判断、行動などの規準となる枠組を準拠枠 (frame of reference) といひ、この枠組を提供する集団を準拠集団という。個人はこの集団の規準との関係において自己を評価し、態度を形成あるいは変容していく。一般には家族、友人などの近隣集団や所属集団であることが多いが、かつて所属していた集団、将来所属したいと望んでいる集団も個人の準拠沸く形成に影響を与えるので、こうした同一視集団、非所属集団をも含めることに特徴がある。
- ハイマンは、集団内における自己の主観的地位評価の準拠点となる集団としてこの概念を始めて使用した。マートンは、スーファアのアメリカ兵の不満度に関する研究結果をもとに、集団規準が内在化され準拠枠が成立してゆく準拠集団過程、準拠集団の選択過程、準拠集団の社会的機能について理論家、体系化を行った。シェリフは2,3人の集団で光点の移動距離を推定させた。最初ばらついていた判断はしだいに一つの判断基準に到達し、ひとたび基準枠が成立すると、後々まで個人の判断基準枠として作用するとした。ニューカムの25年にわたるいわゆるベントン研究と呼ばれている追跡調査によると、大学のキャンパスを準拠集団とした女子大学生は学年を追うごとにリベラルな方向に態度変化を示したのに対して、閉鎖的な友人関係を作ってキャンパスにおける規準と自己の規準とのずれに気づかなかつたもの、ずれに気づきながら家族や出身地との癒着が強いものは保守的な態度を変えなかつた。両者とも大多数のものがその態度を25年後の調査でも維持していた。
- ハイマンやマートンの研究は集団における他者との比較において自己の立場を決定するという機能を果たす比較準拠集団を、シェリフやニューカムの研究は個人の規準を提供する規準準拠集団を扱ったものと考えられる。

Identification 同一視 p.620

- 元来は精神分析における防衛機制の一つであるが、最近では自分にとって重要な人の属性を自分の中に取り入れる過程一般をさして用いられる。発達において同一視(同一化)は重要である。子どもは親から賞罰、禁止を内在化することでその社会・文化に適応可能となり、また重要な複数の他者との同一視を通して、アイデンティティ確立の基礎が気づかれるからである。なぜ親との同一視が起こるのかに関しては、エディプス・コンプレックスとの関連で説明するS.フロイトのほかに、マウラーによるS-R説からの説明がある。彼は、一時的報酬としての養育を親から反復的に受けることで親の特性そのものが二次的報酬かを持つようになり、その結果として親の真似が生じ親の特性が内在化される、とした。また同一視として説明されていた現象を、N.E.ミラーとダラードは模倣、バンデュラはモデリングとよび、学習理論の立場から説明している。

Interim summary

- 認知不協和理論は人々の行動が態度と一緒に葛藤するとき、彼らの行動での道筋に沿うような態度に変えるようにする不快な緊張を生むことをいってる。これは合理的もしくは自己正当化の過程のための一つの説明である。
- 自己知覚理論は、内的混乱が起こる必要がないという反対側で認知不協和理論に挑んだ。内部の手がかりが強かったり、退屈なのを広がり、人々が単純に彼らの過去の行動から態度を推論する。
- 同一視の過程で、私たちは規範に従い、私たちが尊敬し、賞賛する集団の信念、態度、行動を採用する。私たちはそのような準拠集団を私たちの意見と行動を発展し、統制するために使う。準拠集団は私たちの態度と行動を社会的報酬と罰もしくは参照の供給、社会問題を解決する準備を管理するとき統制することができる。
- ほとんどの人々は、一つより多くの準拠集団に同一視し、それは信念、態度、行動での葛藤圧力を生む。大学生はよく家族から大学への視点に動く。これら新しい視点はふつう、後の人生でも維持される。なぜならそれらは内在化されて、大学のあと、私たちは視点を共有する新たな準拠集団を選ぶようであるからである。

Zimbardo ジンバルドー(1933～)

p.454

- アメリカの社会心理学者。イエール大学で博士号を所得し、ニューヨーク大学で講師を経て、1968年にスタンフォード大学の教授となり、その後多くの賞を得て現在に至っている。彼の研究は、衆人と看守のシミュレーション研究や没個性化の研究に代表される社会での暴力、駆るとの社会的影響力、内気の克服、さらに時間的展望などの広範囲の分野に及び、社会問題と心理学研究との現実的でダイナミックな関係を探求するユニークな研究者である。

Group decision making

集団意思決定 p.386

- 複数の人が合議により共通の決定を下す事態。投票による集団的決定とは異なり、成員間での合意形成のための直接的な相互作用を前提とする。現実社会における集団意思決定の重要性と合わせ、グループ・ダイナミクス研究における中心的テーマの一つである。政治学、経済学、経営学等のほかの社会諸科学と関心を共有する面も数多い。

Group polarization

集団極性化 p.386

- 複数の人が合議により共通の決定を下す事態一般的には、個々人の当初の判断や行動傾向、感情などが、集団での様々なやり取りを通して、集団全体としてより強められることをさす。モスコヴィツシとザヴァローニは、ドゴールに対して好意的な大学生同士に、それぞれ集団で討論させた。その結果、ドゴールに対しては、討論ごいっそう高緯度を強めたのに対し、アメリカに対しては、反発や非好意的感情が強まることを見出された。これをモスコヴィツシらは、極性化とよび、それまで知られていたリスクシフトやコーシャスシフト(cautious shift)は、より一般的な現象としての極性化の一つと見なされるようになった。禁煙志願者は金宴会を、また断酒を志す人は断酒会を結成して活動することがより効果的といえる。
- 集団極性化の説明理論として、情動的影響、社会的比較の考え方がある。情動的影響とは、集団自体で他者の議論を聞くことによって、それまで自分が思いつかなかった意見や考えを知ることができるため、意見がより強まるとする考え方である。これに対し、社会的比較の考え方は、人が集団自体において、自らの価値を高め、社会的に望ましい存在として自己を位置づけようとする動機づけが、極性化を生み出すとしている。特に、他者より先んじた意見を提示することが、価値的に望ましいと判断される場合には、極性化が生じやすい。この他、自己カテゴリー理論による説明がある。これは、集団の成員として自己のアイデンティティを捉え、その集団内の規範(ある方向性を持った原型的な意見:プロトタイプ)を自己の中に取り入れることによって、よりいっそう当初の意見が強まるとの考え方である。これは、情動的影響と社会的比較を統合した考え方といえる。

Group think 集団思考 p.388

- ジャニスがその著書のなかで、ジョージ・オーウェルの著名な小説『1984年』に出てきた二重思考(doublethink)の語をもじって名づけた概念。歴史上の重要な政策決定がしばしば重大な失敗に終わるといふ事例の研究の中から、なぜ集団の決定の質がしばしば個人の決定の質に勝らないのかを検討することを通じて概念化された。それは、凝集性の高い集団の中で、そのメンバーが集団の決定にとって重要な情報を適切に処理し損なうことから生じる思考の形態であるとされる。それは集団のなかでの意見の一致追求傾向を中心として、メンバーが個人的な疑問を抑圧し、他メンバーに対してその批判的思考をさえぎり、集団全体として過度の楽観主義、外集団の蔑視や軽視、スローガンの単純思考(ステレオタイプ思考)などの傾向に陥ることをさし、これらが集団の討議の質を低下させるのである。ジャニスはこの現象を促進する変数として外部のストレスやリーダーシップの問題等をあげている。歴史的な例としては、アメリカ大統領ケネディの1962年のキューバ・ピグ湾進行の失敗や、ジョンソン大統領のベトナム戦争に対する泥沼的介入拡大がある。またジャニス以外が指摘している事例研究ではスペースシャトルの爆発事故直前の打ち上げの決定過程(1986)の研究などがある。
- 集団思考概念は広範な議論を引き起こし、また実験的な検討の対象となった。その中で、凝集性を集団の課題へのコミット面度や集団のプライドで指標化せずに集団の中での対人魅力で指標化したときにのみその効果が見られるという指摘や、凝集性よりは決定ルールが全員一致を要求するとき、また決定に及ぶまでのコストが高いときに誤った選択肢への固執が生じ、それが集団思考を生み出す、といった指摘も見られる。

Interim summary

- 制度は、制度の中で重要な役を占める人々の行動を強く左右する規範をもつ。制度的規範。どのように集団相互作用を形成するか。の例は、Stanford prison Experiment によってもたらされ、そこでは平凡な若者がランダムに囚人と看守の役が割り当てられた。模擬刑務所の中で。
- 集団が決定をするとき、彼らはよく集団極性化を見せる。集団決定は同じ方向へ行き、グループメンバーの初めの位置の平均よりも極端になる。これは単なる公の同調ではない。グループメンバーの私的態度は典型的にその上集団討議へ反応の中に移行する。
- 集団極性化効果は情報的影響のある部分のため、その中でグループメンバーは新しい情報を学び、討論のもとで、決定に関連する新しい論議を聞く。集団極性化は規範的影響によっても生み出され、その中で人々はその集団の規範と彼ら自身の初めの視点を比較する。彼らはそのとき多数のほうに同調するように彼らの位置を調節するかもしれない。
- 悲惨な海外の方針決定の分析は、密集する決定者のグループは集団思考の罠に陥るという提案を導いた。その中でグループのメンバーはグループコンセンサスの重要性の中で反対意見を自身に抑制する。その後ちょうさは集団密集性がそんなに問題でないことを提示した。グループの前向きなアイデンティティとコンセンサス・意見の一致を求めることの集団規範への脅しである。証拠は集団結果が抑制的考えの規範を育て、集団の多様性を促進することによって促進されることができると示す。